



the Salamander in
the Circle

第三十章
金星の巫女

峯村 明

Salamander in the circle

第三十章の登場人物		
ダーヴェ	……	ネウトラ評議会・学術調査団の団長 上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員 民族・言語学者
ヤスウ	……	学術調査団の団員
マミヤ	……	ホシナ族の娘
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子
バルダリス	……	元・メッサナの総督家の一人 元・臨時総督代理
コモラ	……	前総督バンテオラの顧問 最高賢者
メンドルブ	……	元・メッサナの化学者団の代表
シバド	……	ベレオーサ総督
レガリオ	……	アンベレオ王国の国王

これまでの主な登場人物					
ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
	ヴァリス将軍	レルの父		サノヒコ	王に仕える役人
	カール	王子 ヘルガの弟		フツヌシ	王に仕える者 将軍
	ロウナス	国務省の高官		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	アンテロ	レルの副官		チドリ	アマセオの妻
	摂政	亡国王の弟		ハマツ	チドリの養父
	ヘルガ	王女		タマシギ	ハマツの美子
ケストル王国	パウル	国王		オモイカネ	世界の果ての島の王に仕える者
	ウルリク	第三王子		コタエ	〃
	ヘンリク	ウルリクの息子		スクナ	〃
	ホベオクー	ケストル人の美女	アマノカガセオ	シトリ族を去った兄弟	
	ソルト	闘技場の警備隊長	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
皇帝	皇帝	バラム&バランケ		双子のジャガー バンテオラの部下	
バソネル	バイスロイの参謀	メルノ		音楽家	
アンベレオ	ソラン	祭祀長	冥界	冥界王	冥界の王
	ドウル	ベレオーサ家当主 シバドの兄		ベネトナシュ	死神
				テクトリ	最下層ミクトランの主
				プラトニオ	メッサナを追放された化学者

目次

[金星の巫女](#)

[457.](#)

[458.](#)

[459.](#)

[460.](#)

[461.](#)

[462.](#)

[463.](#)

[464.](#)

[465.](#)

[466.](#)

[467.](#)

[第三十章のあとがき](#)

[back number](#)

[奥付](#)

金星の巫女

457.

「彼に会わせてもらえぬだろうか!？」

身を乗り出して熱心に懇願する自称芸術家を、レガリオは気の毒そうに見やった。あの少年の横顔の造形を絶賛していた芸術家ならば、さもありなん、と思ったのだ。

「すまないが、それはできない。なんといっても、ご本人が人と会うことを望まぬ」

「人と会いたくないって——貴方とも？」

「うむ。ただ、ソランがときどきご機嫌伺いに行ってる。それも、身の回りの世話をしている者たちといっしょに、という条件付きでの面会だから、ほんとにご機嫌を伺ってくるだけだけどね」

「ソランさまというと……」

レガリオは意味ありげな目でバイスロイを見た。「祭祀長だよ」、と。そして、これ以上のことは言えない、と目が言っていた。

祭祀長が自ら出向くとは、相手が神的存在と関わりがあるということではないか!

すると、イリチャは——あの、生贄を要求する神と同一ということなのか！？

458.

新たな統治者に反感を抱いた先住民によって暴動が起きるのではないかというダーヴェの直感は、はずれた。

総督就任の日、おぞましい惨劇を見せつけられた旧メッサナ市民の衝撃は計り知れないほど大きく、人々は得体の知れない恐怖に慄き、抵抗する意思を失った。

それでも生活しなければならないから、仕事に出かけ、食料や日用品の調達に出かける。人々はどんなに遠回りになろうと、総督府の前を通ることを避けた。そうやって職場へ出かけ、マーケットへ出かけた。多くの学院は閉鎖こそされていなかったが、学生たちの活気はすっかりなくなった。外部とは連絡がとれず、また出て行くこともできず、内部はそんな有様だったから、将来に希望を持つようはずがなかった。世界のおよそ半分が壊滅し、人が住める環境ではなくなっているのだということさえ、学生たちや旅行者は知らされていなかったのだ。

さあ。

どうする。

ダーヴェは思う。こんな人々をどうやって統治するのだ。アンベレオよ。いや、ベレオーサ家よ。

『化学者の館』といい、旧メッサナ市には世界中からきわめて優秀な人材、また、将来そうなるべき若者が集まっていた。アンベレオはその彼らを生殺しにしようというのか。

そして旧メッサナ市民とアンベレオは、同じ人種、同胞である。どんな利害関係があるろうと敵対する理由などないはずなのだ。なのに何故、アンベレオは侵略者のようなマネをするのだろう。

はるか後の世、今とは異なる地形に変わってしまった世界で、東方から海を渡って来たヨーロッパ人がこの大陸の端で先住民を虐殺し、高度な文明の遺産を破壊し尽くしたことを、その狂気を、ダーヴェは知る由もない。

それでも、ダーヴェはそのことをひそかに恐れた。先住民虐殺と高度な文明の遺産の徹底的な破壊を。

459.

シパドは短剣を弄んでいる。黒曜石の短剣。バイスロイを着替えさせた侍従のひとり
が、「こんなものを隠し持っていました」と、ご注進におよんだのだった。

黒曜石を扱っている工房の者に鑑定させてみたところ、「じつに、実用的な作りで、じっさいに生き物を仕留めるためのものです。我々の知らない技術で加工されています。この硬度、透明度、色。素材そのものも、この地の物ではありません」というのだった。

「では、ケストルではこのようなものを作れるのか？」

「おそれながら。ケストルでは黒曜石は採取できません。加工する技術も持っていません。……ただ……」

「ただ、何か」

「我々職人は石を加工する際、常に金星神の指導を仰ぎながら作業をするのです。この短剣からもその痕跡を感じます。

それにしても——これほどの素材、これほどの技術で作られたものなら市場に出回っていてもおかしくないのですが。このような物を目にするのは生まれて初めてでございます」

シパドは職人に銀貨をひとつ投げてやり、目を光らせ、物思いに沈む。

さて。

どうする。

どう仕返しをしてくれよう。

460.

神殿内には大勢の人がいるにもかかわらず、ひじょうに静かだ。みな黙って、黙々と、祈りを捧げている。

マミヤもその中にいた。パルダリス邸で働く女官に頼んで連れてきてもらったのだった。

ヒューダーはあまりいい顔をしなかった。街中に出かけることには不安があったからだ。それでもマミヤの精神的衰弱を見ているのは耐えがたく、了解したのだった。不承不承ではあったが。

*

ダーヴェはこっそりとマミヤに打ち明けた。「ヒューダーの両親は昔、巨人族に襲われて犠牲になったんです。幼かった彼はその現場を目撃している。だから、あなたがどんなにショックを受けたかよくわかっていますよ」

「教えてくださってありがとうございます。ダーヴェさま。わたし、ヒューダーのためにもお祈りしてきます」

*

そんなやりとりをして出かけてきた。

マミヤはこの時初めてヒューダーの生い立ちを知った。辺境の地で両親を失い、ダーヴェに拾われ、やがてメッサナで勉学に励む機会を得、ダーヴェを追って評議会に入ったことなどを。

「彼は何かしら、精神に欠乏感を持っている。実の親なしに育つということは、本人にとってたいへん不幸なことなのです」

「でも。ダーヴェさまが親代わりだったんでしょう？」

ダーヴェは笑った。「ただの代理人ですってば」

ダーヴェの脳裏にあの日の情景が一瞬ひらめく。泣き叫ぶ幼いこどもが彼を振り向き、叫んだのだ。「どうしてもっと早く来てくれなかった！ どうして！！」

ダーヴェは学者にすぎない。早く来たところで巨人族の突然の襲撃をどうにかできるわけがない。しかしダーヴェは黙って幼いヒューダーの殴打を受け止めた。

時は経って、評議会本部で彼と再会したとき、成長した少年は言った。「やり場のない感情をぶつけてしまったことを後悔している。どうか許してほしい」と。

ダーヴェは応えた。「ご両親はあなたを愛していた。あなたもご両親を愛していた。ならば激しい怒りも、深い悲しみも、当たり前の感情ですよ」

出かけていくマミヤを見送りながら、ダーヴェはひとり想いに沈んだ。

(ヒューダー。あなたの中の欠落を満たしてくれる相手をあなた自身で求める時が来たのではないですか？ そんな気がしてなりませんよ)

461.

金星神を象徴する黄金の円盤に向かってマミヤはひたすら祈った。

かつては供えられた花や果物の香りでむせ返るほどだったというが、今はその半分もないだろう。人々の表情には余裕というものがなかった。

それでも人々は、旧メッサナに暮らした人々は祈った。友人知己のために。家族のために。自分自身のために。そしてあのケストル人の魂が救われるように。

その波動はマミヤには既知のものだった。マミヤのホシナ族もまた友人知己のために、家族のために、自分自身のために、金星を仰いで祈りを捧げるのが習慣だったから。故郷を遠く離れた見ず知らずの風俗の土地にしながら、みな、考えることはおなじだわ、そんな気持ちになるのだった。

知る限りの人のことを祈ろう、マミヤはそう思った。漠然とした祈りよりも対象が定まっている方が気持ちが集中しやすいということを彼女は経験から知っていて、記憶の中から次から次と知っている名前を引っ張り出した。

父母や祖母から始まって、キト、コマ、ゴン、ホシナ族のみんな。スクナとコタエの兄妹、ヘルガ王女、レル・ヴァリス。

それにダイダラボッチ、どうしているかしら。元気にしてるといいんだけど。

それはそうと、イリチャよ、問題は！ ヒューダーもダーヴェさまも彼のことになる
と黙っちゃうし。バイスロイさまは『わからない』って言うし。どういうことなんだろう。ああ、ヒューダーとケンカかなんかして別れちゃったとか？ それとも……居心地のいい場所を見つけちゃったとか？ そうだなあ、あの子、人間じゃなくて竜だったし。ほんとの居場所を見つけたのかもね。案外、ほんとのお父さんお母さんに巡り合っちゃったりなんかして。もしそうだとしたら、人間といっしょにいるより、よっぽど、幸せだよね……

でもね、イリチャ。おまえといっしょに空を飛んだ時のこと、私は忘れてないわよ。嵐の中で雨宿りしたことも、雨上がりの朝、白い地面をふたりで歩いて足跡をつけて遊んだことも、よく覚えてるよ。忘れてないよ。だから……もし寂しくなったら、いつでも帰っておいで。私はいつまでだったおまえのことを待ってるからね……

祈りと、とりとめもない回想とにひたっていたマミヤは、ふいにとなりにいた女官から袖を引かれた。はっと我に返り女官を見返すと、相手は険しい目で周囲の様子をうかがっていた。

神殿内が妙にざわついている。

なにかあったのだ。

462.

その日、旧メッサナの旧総督代理で、今はなんの権限ももたないただの市民になってしまったパルダリスのもとに、アンベレオから通達を持った使者がやってきた。

「権限をすべて取り上げておいて通達だけ送ってくるとは、なんのつもりだ！ わたしはただのおじさんなんだぞ！」

権限など持たなくても美男子にして温厚、神さまのようなパルダリスがムカムカを隠そうともしないのは、嫌な予感しかしなかったからだ。

ダーヴェとヒューダー、ヤスウ、コモラがアンベレオからの使者訪問の知らせを聞いてパルダリスの執務室に集まって来た。やはり、嫌な予感からだった。

みなはかたずをのむ思いで通達書類を開くパルダリスを見守る。

書類は二通。それが、はらり、とパルダリスの手からデスクに落ちた。その貌は表情がなく、そして蒼白。

ヤスウでさえ、そこになにが記されているのかとせつつく気を失くす、パルダリスの異様さ。

やがて意を決したダーヴェが、つとデスクに歩み、書類を拾い上げる。パルダリスはその動作をうつろな目で追っている。

ダーヴェは書類に目を通し、かすれた声で言った。

「一通は、ネウトラ評議会加盟国が全世界に向けて発した声明です」

ヒューダーとヤスウの視線を痛いほど感じる。

「加盟国すべてがアトランティス大陸にあったわけではない。巨人族の被害も、放射能雨の被害も受けなかった国々があるわけです。それらの国々から、ポリス消失について説明を求めるといふ、声明です。

そういった国々から評議会に協力するために派遣されていた人がいるわけですし、たとえばヤスウのようにね、彼らの命はどうなったのだと、本国が心配するのは当然といえば当然」

「そういやあ」、ヤスウがぼつりと、「スクナさんが言ってたっけ、国外にいる国民になにかあったら、まあ、事故とか事件でき、なにかあったら、俺らの王は黙っちゃいねえだろう。つまり、責任をとらせるだろうって」

「ヤスウ、まさにそれなんです、アンベレオが言って来たことは。旧メッサナに滞在中の評議会の人間はひとり残らず、すみやかに、総督府に出頭せよ、と」

463.

「出頭……？　なんか、やな響きだぜ」

「評議会のしたことは、犯罪だ、とっているのだ」、とヒューダー。

「どのような経緯があってネウトラ・ポリスが消えたのか、我々には知るすべがありません。単に事故の可能性だってある。それを、いきなり、出頭せよ、とは」

重い沈黙。

やがてヤスウが、うつむいたまま声をあげた。

「上等じゃねえですか。俺らは評議会の人間として、堂々と総督府へ乗り込みませうぜ」

ヒューダーはちょっと笑った。「その意気やよし、だな、ヤスウ。俺もその考えに賛成だ。だがな、おまえは行くことはできないぞ」

「……なに言ってんだよ」

「そうですよヤスウ、あなた評議会の身分証を持ってないじゃないですか」

「あ」

ヒューダーのそれはいったんはソルドに取り上げられ、ミクトランで彼を叩きのめしたイリチャが取り返したのだった。振り返ってみれば、つくづく、疫病神のような代物、呪いのアイテムだなど、こっそり思うヒューダーである。

「人助けのために、やってしまったんだろ？ おまえはもう評議会の人間じゃない」

「そそそそそんな！ ねえコモラさん、いそいで作ってくれない??」

「え、身分証偽造など、りっぱに犯罪ですがな」

「まったくだ、高潔なコモラ師になんてことやらせようとするんだヤスウ」

「でも、コモラのじいさん、やってみてもいいかなって顔してるぜ」

ヒューダーはヤスウに、ダーヴェはコモラに言った。「やめろ」「やめてください」

464.

ヤスウは評議会加盟国の声明が記された書類を見せられ、絶句した。

声明に賛同した国々が十数か国、名を連ねている。その筆頭、つまり代表国が、『ニッポン』、そして、王の名。

スクナが言ったことは嘘ではなかったのだ。王は黙ってはいなかった。

スクナがそう言った時、問題になっていたのは巨人族だった。巨人族を操る者に対して黙ってはいない、というのが真意だった。しかし今は、ネウトラ・ポリス消失が焦点になっている。消してしまったのはほかでもない、評議会自身である。

メンドルプは、黄金門の一族が地上にいた人々を救ったのではないだろうかと思われるという、なんともまわりくどい言い方をしていた。だいたい、確かめようがない。聞いている方は少しは気が楽になるくらいの話でしかなさそうだ。もしかしたら本当にそれだけの話だったかもしれないとヤスウは思う。

(あのじいさん、そういう人だからなあ。まあ、気持ちはありがたいんだけど)

(しかしなあ、ポリス消失の責任が評議会自身にあるってわかったら、いったいどうなるんだ?)

パルダリスは瞬時にその先がわかってしまって顔色を変えたのだ。

国名と王名とを見つめて、ヤスウは乾いた声でつぶやいた。「ありがたくって、涙が出ちまいますよ」

465.

新総督の治安部隊が金星神の神殿を取り囲んでいた。神殿内で祈祷中だった人々は一人も漏らさず捕らえられ、総督府へと連れていかれた。いけすに網を投げ込み、魚をいっぺんにさらいあげた、そんな有様だった。

その模様は目撃した人の口から一気に街中に広まった。もちろん、パルダリス邸にも届いた。市民が騒然とするなか、一昼夜たって、捕らえられていた人々が次々と帰ってきた。その人々によれば、捕らえられた理由も帰された理由も、何もわからないというのだった。

そして、パルダリス邸の女官はひとりで帰ってきた。

「マミヤは？」と尋ねられ、女官は呆然とした面持ちで首をふり、「わかりません」、と答えた。「順番に、ひとりずつ、部屋へ呼ばれ、住所と氏名を聞かれたのです。それだけでした」

ダーヴェとヒューダーは総督府へ“出頭”するところで、マミヤが帰ってこないことを知ったのだった。

「ヒューダー、あなたはここに居なさい、マミヤの帰りを待っていなさい」、ダーヴェは慌ただしく言う。ヒューダーの頬の筋肉が動き、奥歯を噛みしめているのがわかった。

「アンベレオのすることは、妙なところで徹底している。たとえ、先生がひとりで出向いたところで、仲間がいるだろうという展開になることは容易に想像がつく。おそらく、出頭要請で効果がなければ、それこそ網を投げて魚をさらうような手段をとるだろう」

マミヤのように、とふと閃いたがヒューダーはそれを無視した。

「もし、なにかしらの虚偽があったとわかれば、アンベレオはそこを徹底的に突いてくるさ。つまり、先生は酷い目に遭う。それは目に見えている」

「ヒューダー！ わたしのことなど！ どうでもいい！ あなたはその身分証を捨ててしまいなさい！ 今、すぐに！！」

ヒューダーはおだやかに首を振った。

「そうはいかない。オレは評議会の人間だ。そのことに自負と誇りを持っている。先生。評議会のやったことは、たとえ事故であったにせよ、評議会の人間が責任を負わねばならない。そうしなければ——神は人間を許さないだろう」

*

奇しくもこの同じ時に、美しい庭園を散策していたメンドルプもまた、同じことを考えていた。

原子とは、神々の秩序の法則、人類のための摂理、その設計図を圧縮したもの。それをもとに、この世界は構築された。（※あとがき参照）

あまりに深遠な領域にある故に、その認識は一般には伏せられてきた。その認識があるならば、原子核を分裂させるという行為がどれほどの——愚挙であるか。だが、人間はそこへ手を伸ばしてしまった。

神は——愚かな人間を許さないだろう

466.

若い女が無遠慮に、じろじろと、マミヤを見ていた。足元から頭のとっぺんまで、水のように色の薄い目が下から上へ、また下へと動いていく。獲物をじっくりと品定めする蛇の目。

蛇など故郷にはいくらでもいてよく出くわしたから、そんなものを怖がるマミヤではなかったが、気持ちが変わると思った。たぶん、野生の生き物の思惑はいたって純粋なものだからだ。必要なら狩り、狩られる。そんな必要がなければ、互いに目を合わせたりしない。ただそれだけのことだ。

この女蛇の視線には邪な思惑が感じられた。気持ちのわるさはそのためだった。そのうちにマミヤは気づいた。

（このひと、このあいだバルコニーにいた人だ……）

お揃いの衣装を着たバイスロイを隣に従えていた女だ。

ヤスウがお揃いだということ面白がるので、同じデザインの服を着ることがなぜそんなに面白いのかと聞くと、ヤスウは、「こうゆうことだからさ」、と小指を立ててみ

せた。すると、いきなりヒューダーのげんこつがとんだ。「ってえなあ！ なにすんだよ！」「マミヤに下世話なことを教えるな！！」

それでまあ、なんとなく察しはついた。事件の夜、バイスロイの元へ忍んで行ったコモラからも話は聞いた。この女は一方的にバイスロイに想いを寄せている、というわけだ。

(だけど、それと私となんか関係があるの？)

腑に落ちない思いでマミヤは女の目線を受け止める。眉根を寄せた、若干怪訝な面持ちで相手を見返していると、それが相手の機嫌を損ねたらしい。女はマミヤを品定めするのをやめ、ふいと横を向き、傍らの卓からなにか取り上げた。

それを見てマミヤは、思わず、はっと息を呑んだ。

「これに見覚えがあるのだな？」

マミヤがすぐに答えなかったので、女は苛立たし気に繰り返した。「見覚えがあるのだな！？」

マミヤは恐れなかった。気持ちが変わるく不快ではあったが、恐れる必要などなかった。それで「ええ」と答えた。「もとは、私の物ですから」

「おまえの物、だと？」

「はい。故郷の人から贈られた短剣です。お守りとして。邪なものから守ってくれるんです」

なにを思うのか、女はじっとマミヤに目を据えている。「これを持っていたのは、ある男だ。おまえはこれを、その男に盗られたのかそれとも」

マミヤはなぜか次第に気が高ぶってきて、女の言うことを遮った。

「たしかにある人に差し上げました」

「なぜ」

回答はするりと口から滑り出た。「邪なものから守って差し上げたかったからよ」

めらっ、と、女の中から炎が燃え上がった。

467.

黒曜石の短剣はマミヤを助けたいという動機でゴンからヒューダーに手渡され、ヒューダーが冥界入りする際にイリチャへ、イリチャがマミヤを助けたのちはヘルガへ、ヘルガからバイスロイへと、遍歴を重ね、冥界では数々の危難からバイスロイを救った。むしろ、持ち主がバイスロイに移ってからが本領を發揮し出したといえたかもしれない。

マミヤはヘルガに渡ったはずの短剣をバイスロイが持っていることに驚いたが、迷うことなく、バイスロイに伝えたのだった。その時の言葉が、蛇女に向かって、するりと口から滑り出てきた。

「私の一族は金星の加護のもとに黒曜石を加工するのです。その短剣はそれ自身の意志で持ち主を選んできたように思います。つまり……金星神の意志が働いているのではないかしら」

相手を刺激しない方がいいとか、知らぬ存ぜぬで切り抜けようとかいう気は、マミヤにはさらさらなかった。うまくやることが利口だか得だとかという考えもなかった。それは向こう見ずで好奇心が強く、景気のいいマミヤの性格そのものでもあったのだが、己が熟考したわけでもないことが口から出てくるのを止めることができなかった。

蛇女がその身の周りに不穏な雰囲気を持ち上げさせていることがわかっているにもかかわらず、やめられなかった。まるで何者かが乗り移ってマミヤを操っているかのようだった。

第三十章 『金星の巫女』

第三十一章へ続く

第三十章のあとがき

(※) No.465にて、メンドルブ博士の言ってる『原子について』はこちらの『[ロゴスと原子](#)』を参照

金星 (Venus) の画像を検索していると、なぜか食虫植物 (ハエトリグサ) がひんぱんに出てくる。手のひらをかぱっと合わせるようにして虫を捕まえてしまう、あれです。なんなんだ。ぞわぞわしながら調べてみると、ハエトリグサは英語で Venus Flytrap、女神のハエ取り罠というらしい。Venusつながりだった。意外にもマミヤとシパドの対比をいい具合に象徴してるように思えました。が、さすがに表紙にハエトリグサはないよねということで金星だけにしました。

さて、今月も残りあと十日あまり。次は年明けとなりそうです。このところ月に二回くらいの更新となってきたいて、筆者的には今これくらいのボリュームと速度がちょうどいい感じなんですけど読者さま的にはどうなのでしょう。あ、すぐに読んで！ というものではありません！ お時間のある時に、ご自分のペースでお楽しみいただければ幸いです。おつきあいいただいているみなさま、そして応援ツールを押してくださったみなさま、ありがとうございます。月二回のペースはひとえにみなさまのおかげです！！
では、どうかよいお年を。

2023年12月20日 記

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだ。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようと画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナが抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

『第二十三章 ミクトラン脱出』

ケストル人ソルドらがミクトランを去った。時と場所を選ばなければ脱出は可能なのだが、ただ、計り知れない危険を意味していた。そのために、スクナの脱出計画をダーヴェは強硬に反対する。しかしヒューダーは絶対に安全な道などないと言い、反対するダーヴェを牽制する。そしてスクナともう一名の枠に、バイスロイはヘルガを推す。彼はメッサナの音楽生迫害事件の被害者たちはかつて親交を結んだ者たちだと知り、物理的にメッサナに最も近い場所であるミクトランに残ることを選んだのだった。

ミクトランの怪物の群れが大挙して押し寄せるなかを、スクナとヘルガは脱出を決行する。

『第二十四章 トーラの鷲の園』

ヘルガはアマノカガセオによって大陸中南部の森林地帯へといざなわれる。陸上からはとうていどり着けない険しい地形のなかに現れた湖に浮かぶ島・トーラで、ヘルガは去る大災害の直前にケストル宮廷から退避したはずの家臣たちと再会する。そこは掘削中の地下道がいずれ到達する地、出口でもあった。

一方、ミクトランに残った一行の巨人族探索は遅々として進まず、仮面の怪物の執拗な攻撃に手を焼いていた。怪物群の攻撃を一手に引き受けているイリチャに、戦いを宿命づけたかのような名づけをしたことにヒューダーは責任を感じていた。

『第二十五章 イリチャの行方』

ヘルガからの贈り物である指輪を追ったイリチャは死神ベネトナシュの手に落ちた。しかし、ミクトランの主・テクトリが横取りする。わけもわからず嘲弄されるイリチャだが、巨人族が造られる現場をついに目にする。そこはミクトランの中に作られた異次元空間で、製作者はメッサナを追放された化学者プラトニオ。評議会の爆弾が巨人族を殲滅すると同時に地上のあらゆるものを汚染したことがわかると、テクトリもプラトニオも慄く。評議会の爆弾とは、メッサナが封印していたきわめて危険なものだったのだ。そんな彼らの前に現れた男が巨人族製造を弾劾したことによって巨人族問題は集結しそうにみえたが、地上を汚染したのが地上の人間であると知ったイリチャは激しく落胆する。

第六部

『ジャガー狩り』

ミクトランで行われていた巨人族製造はある人物の一声で打ち切られた。ミクトランは冥界から切り離され、ダーヴェたち三名はイリチャの懇願により地上のメッサナへと送られた。巨人族の危機が無くなり、ミクトランを脱出できたことよりも、その急転直下の転換ぶりに三名は戸惑う。なによりイリチャが謎の人物に連れ去られてしまった。彼らは敗北感と無力感とに苛まれる。

メッサナの前の提督パンテオラを飼い主としていたジャガーのバラムとバラケもあるじを失った現実と直面し、失調し始める。そんな折、メッサナ中のジャガーがすべて集められ、くにが管理するという通達が発表された。

『第二十七章 仮面の神』

黄金門の後継者バイスロイは身分を隠したままメッサナの街中に出、メルノの生家跡でアンベレオの女先遣隊長シパドと出会う。バイスロイが彫刻を得意とする芸術家だという話を真に受けたシパドは、彼に記念硬貨を造らせるため、アンベレオ王都へと送る。ヒューダーたちは出かけたまま戻らないバイスロイを心配するが…

メッサナ市奪還に湧き返る王都だったが、王場内には緊張が走っていた。アンベレオが信奉する神が、その代理人を送り込んできたのだ。そして記念硬貨に彫られるべき人物は、国王から神の代理人へと変更になった。

バイスロイはモデルである神の代理人と対面する。

『第二十八章 9かける3番目の王国』

メッサナ市奪還記念硬貨に刻まれる人物とはイリチャだった。かつてメルノが歌った歌を耳にして動揺するイリチャだったが、かえってバイスロイに対して心を閉ざしてしまう。

モデルのデッサンを携えてメッサナに戻ったバイスロイは、女先遣隊長シパドが新たな総督として就任することを知る。シパドは本来彼女のベレオーサ家のものだった土地を取り返し、治めることを当然と考えていた。そして二日後の就任式の折り、バイスロイに夫として、隣に立つよう求めるのだった。

古い昔話『9かける3番目の王国物語』には王と別れた后が特徴のある指輪を持っていたことが描かれている。それと同一と思われる指輪を持って現れたイリチャ。彼が金貨に刻まれたことはいったい何を意味するのか。

『第二十九章 ベレオーサ市の惨劇』

新総督就任の日、シパドはおそろしいことを企んでいた。衆目のなか、巨人族にケストル人ソルドらを襲わせたのだ。バイスロイに求婚を断られた腹いせだった。新総督お披露目を見物にきた市民たちはシパドの残虐な性格を知り、眼前で繰り広げられた惨劇に恐怖に慄く。ダーヴェェやヒューダーの衝撃はさらに大きい。ソルドたちを襲った巨人に見覚えがあった。

アンベレオは巨人族を商売に利用できると考えていた。それがアンベレオの思惑だったのだ。

しかし総督就任の儀式を血で汚したことは本国の怒りを買い、シパドは呼び出しを受けアンベレオへ向かう。王家から厳しい叱責を受けたシパドの兄・ドゥルは妹に激怒し、同行してきたバイスロイを深夜の王都へ放り出してしまふ。

奥付

Salamander in the circle

第三十章 金星の巫女

2023年12月30日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D&R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [イラストAC](#)

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
